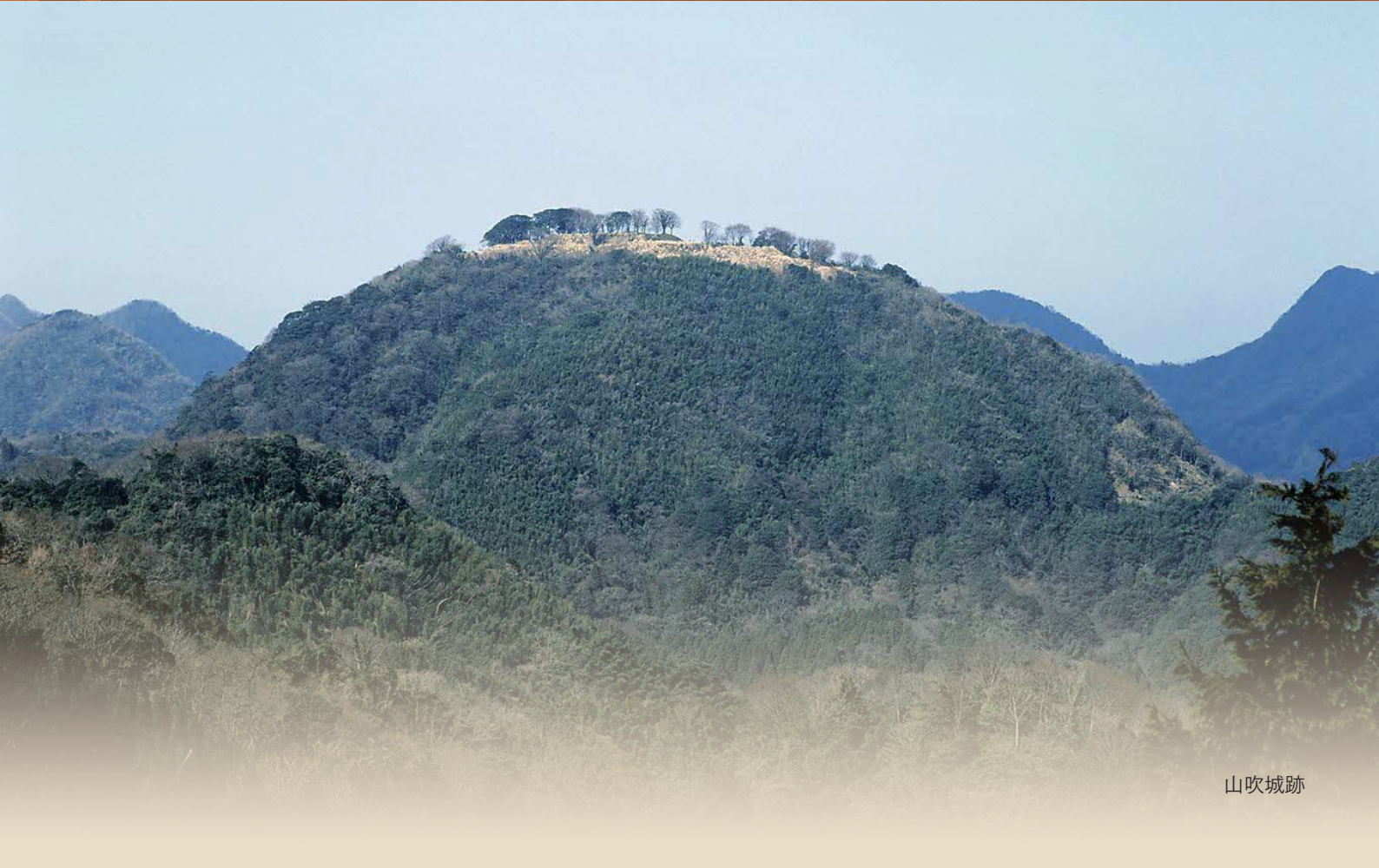


The background of the entire image is a solid dark orange color. Overlaid on this background are numerous silhouettes of samurai warriors. These figures are depicted in various dynamic poses, some standing and others in motion, holding long spears (yari) that point upwards. The silhouettes are rendered in a slightly lighter shade of orange than the background, creating a layered effect. The overall composition suggests a scene of battle or preparation for war, which thematically links to the text about the silver mine wars.

石見銀山を奪取せよ!!

～銀山争奪戦の開始と終焉～



山吹城跡

 世界遺産石見銀山

石見銀山は、大永7(1527)年に九州博多の商人^{かみやじゅてい}神屋寿禎により発見されて以来、大正12(1923)年の休山まで約400年にわたって採掘されてきた日本を代表する鉱山です。

環境に配慮し、自然と共生した鉱山運営を行っていたことが特に評価され、平成19(2007)年7月に鉱山遺跡ではアジアで初めて「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産に登録されました。

遺産は14の資産で構成され、それぞれ「銀鋤山跡と鋤山町」、「港と港町」、「街道」の3つの分野に分類されます。このうち「銀鋤山跡と鋤山町」は、16世紀から20世紀にかけて操業された鋤山町そして今回紹介する山城跡で構成されています。



なぜ奪い合った？

山城が最も多く築かれたのが戦国時代です。戦国時代には大名同士の争いが絶えず、自分の領地を守る必要がありました。そのため険しい自然地形を利用した天然の要害と言える山城が全国各地に築られました。

石見銀山が発見された大永7(1527)年も戦国時代。発見以降、銀山をめぐる激しい争奪戦が繰り返されました。なぜ石見銀山をめぐる争いが起きたのか。戦には大量の武器や物資などが必要でした。それを調達するためには莫大な資金が必要なため、その財源として石見銀山の銀が喉から手が出るほど欲しかったのです。その争奪戦の舞台の中心となったのが山吹城でした。

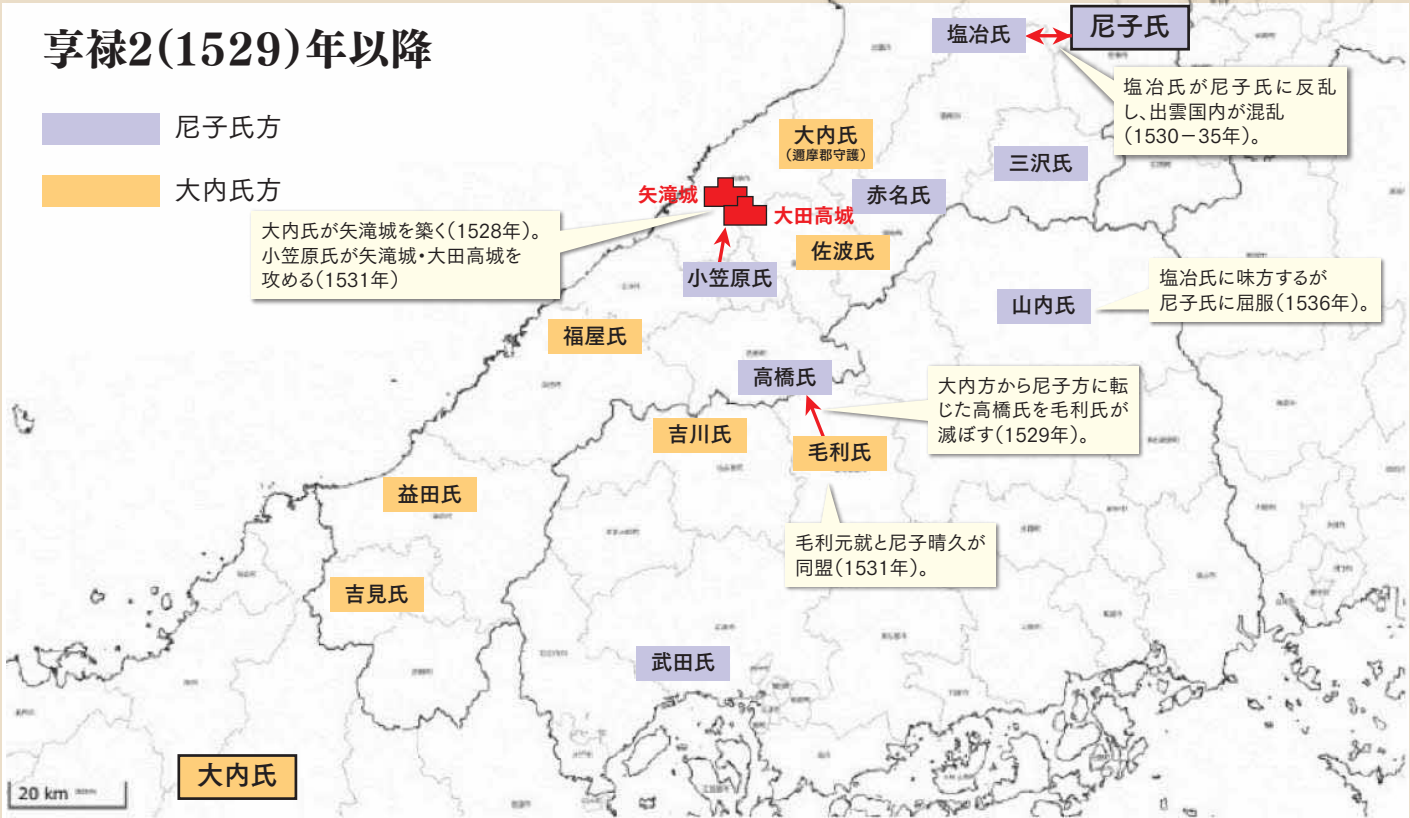
山吹城からは仙ノ山や大森の集落、日本海へ向かう街道などが遮られることなく眺めることができます。そのため山吹城を制することが銀山支配の鍵だったのです。

石見銀山を取り巻く諸勢力

石見銀山が発見された頃、中国地方では周防国の大内氏、出雲国の尼子氏、安芸国の毛利氏などの戦国大名が勢力拡大を目指して争っていました。石見銀山の領有をめぐる邑智郡川本郷(川本町)の小笠原氏や邑智郡佐波郷(美郷町)の佐波氏、邇摩郡福光郷(大田市)の石見吉川氏など石見東部の武将たちを巻き込みながら激しい争奪戦へと展開していくのです。

争奪戦の始まり

享禄3(1530)年、出雲国では塩冶氏が尼子氏に対して反乱を起こしたため、尼子氏は大内氏の支援を得てこれを沈静化させることに力を注ぎました。一方で大内氏は北九州への進出を目指して動いていました。この状況を察知した小笠原氏が、2大勢力の隙を突く形で銀山方面への進出を図ります。



『銀山旧記』に見る争奪戦

銀山の発見から本格的な開発を経て繁栄する様子を記した書物に『銀山旧記』があります。江戸時代後半に書かれたもので、大げさな表現や実際とは違う状況を含んでいますが、銀山研究の基礎資料です。その中で銀山争奪戦については次のように書かれています。

享禄元(1528)年に大内義興が銀山の守備を矢瀧城主に命じ、同4(1531)年に川本の小笠原長隆がその矢瀧城を攻め落として銀山を支配する。その後、大内氏、尼子氏、小笠原氏による銀山の支配が繰り返され、小笠原氏が永禄3(1560)年まで銀山を支配し、最後は毛利氏が支配した、というものです。

銀山発見直後から、銀山をめぐる争奪戦が始まっていたことがうかがえます。

小笠原氏、銀山に迫る

大田高城での合戦で敵を打ち取ったことへの褒美として、小笠原長隆と長徳父子が井原十郎右衛門に官途を与えた文書があります。官途とは「右衛門」や「兵衛」など律令期の役人の呼称で、井原十郎はこの時「右衛門」の名前を授かったのでしょう。

また、大田高城は大田市祖式町にあったと考えられており、小笠原氏が銀山のすぐ近くまで勢力を伸ばしてきたことがうかがえます。ただし、最近の研究成果によると、『銀山旧記』にしばしば登場する小笠原氏は、石見銀山を直接支配するに至らなかったと考えられています。

【意味】(太)

このたび、大田高城を攻め落とした時の合戦で、長田若狭守をあなたが打ち取った。たいへんな手柄である。したがって、「右衛門」の官途を授ける。後日の証明として、この文書を発行する。

享禄四年卯(四)月七日

井原十郎右衛門殿

(小笠原)長徳

今度太田高城落居之時致合戦、長田若狭守打取候、高名之至候、仍官途申付候、為後日以一行申候、謹言、

享禄四年

卯月七日

長徳(花押)

長隆(花押)

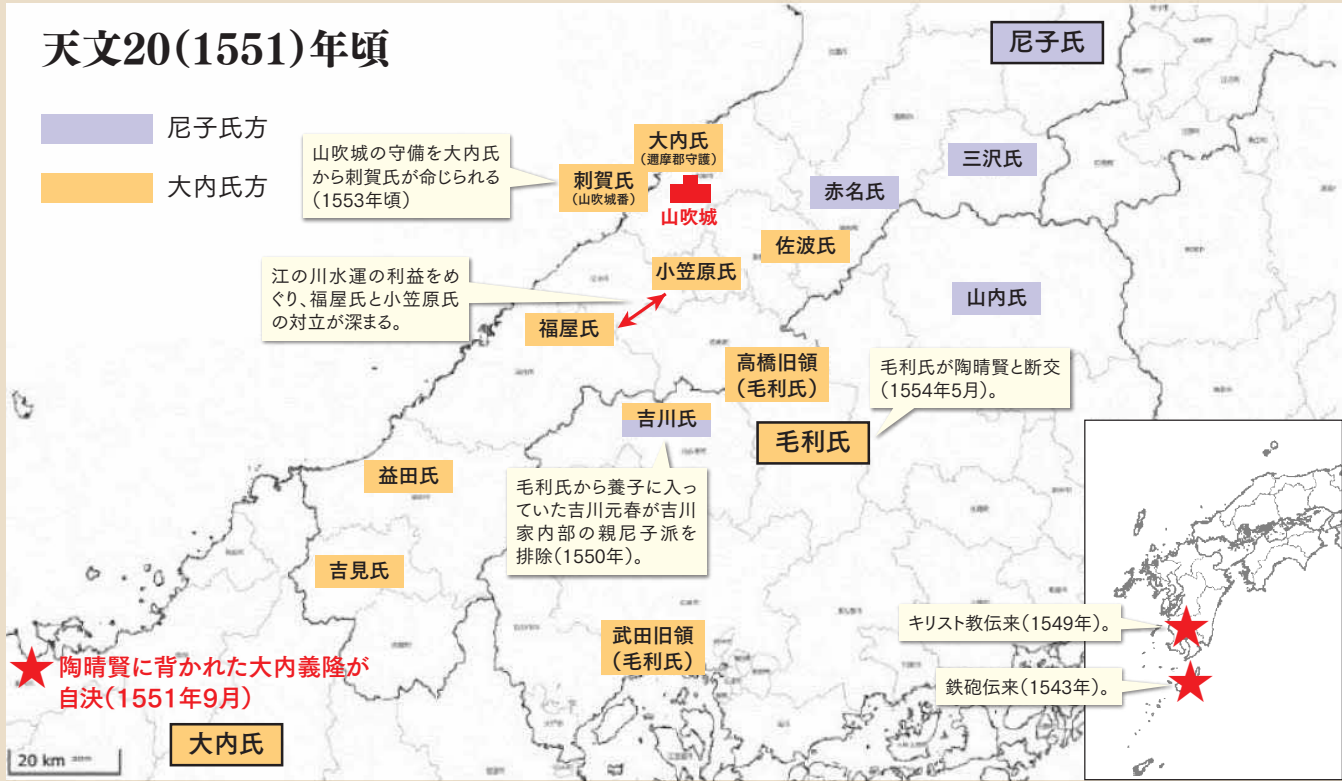
井原十郎右衛門とのへ

庵原家文書(島根県立図書館所蔵)



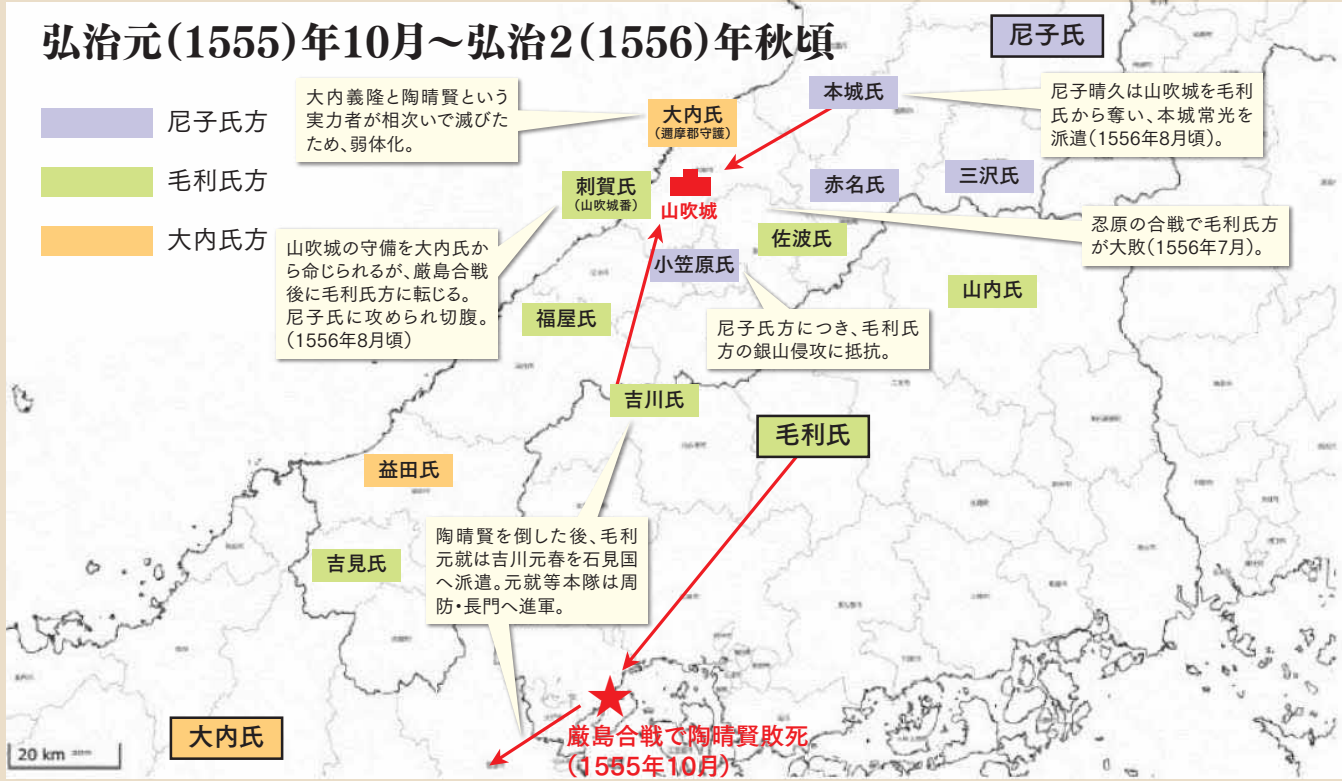
小笠原長隆公像(川本町長江寺所蔵)

石見銀山争奪戦の実像に迫る

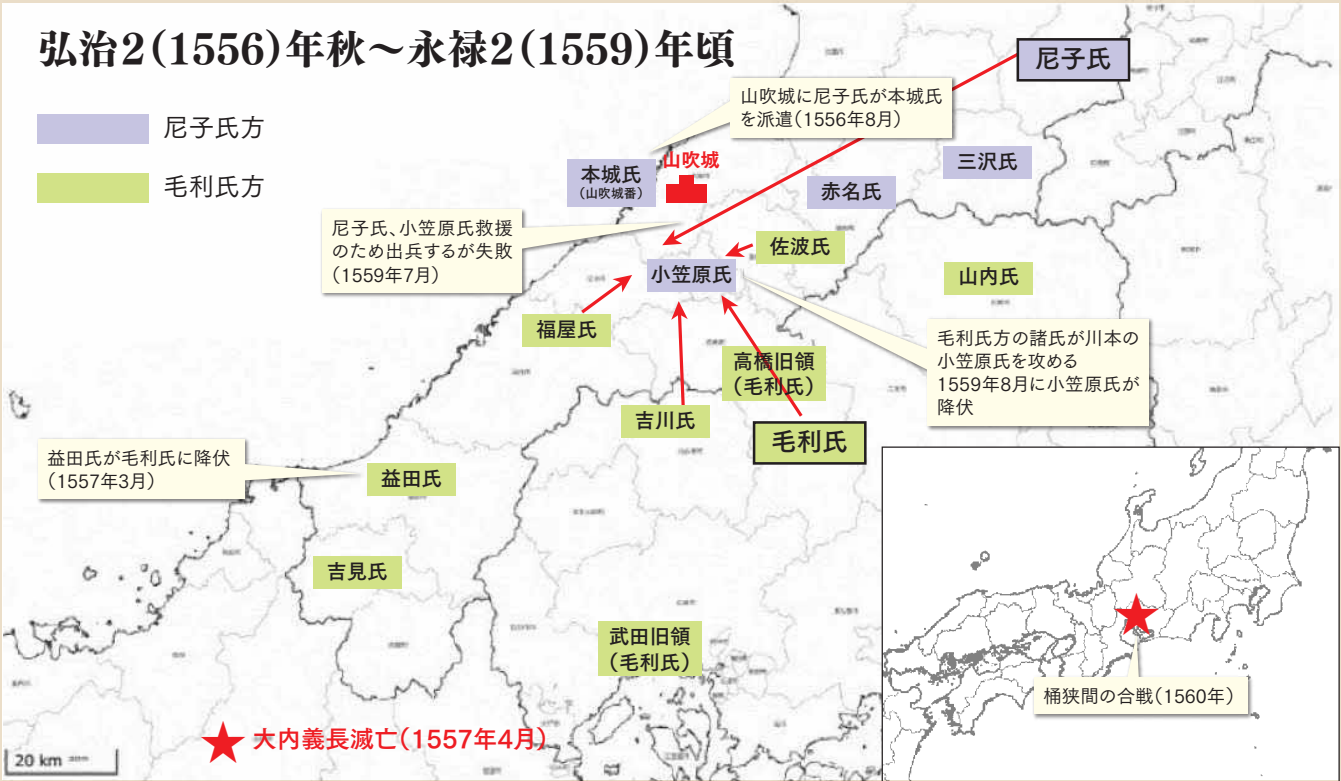


天文20(1551)年に大内義隆が、家臣である陶晴賢(注)の謀反によって自刃に追い込まれます。大内氏の実権を握った陶氏が擁立した大内義長(注)は、天文22(1553)年には、安濃郡刺賀郷を本拠地とする刺賀長信を山吹城の城番に命じて銀山支配を継続します。しかし、安芸国の最大勢力に成長していた毛利氏が天文23(1554)年に反陶晴賢の立場を鮮明にしました。

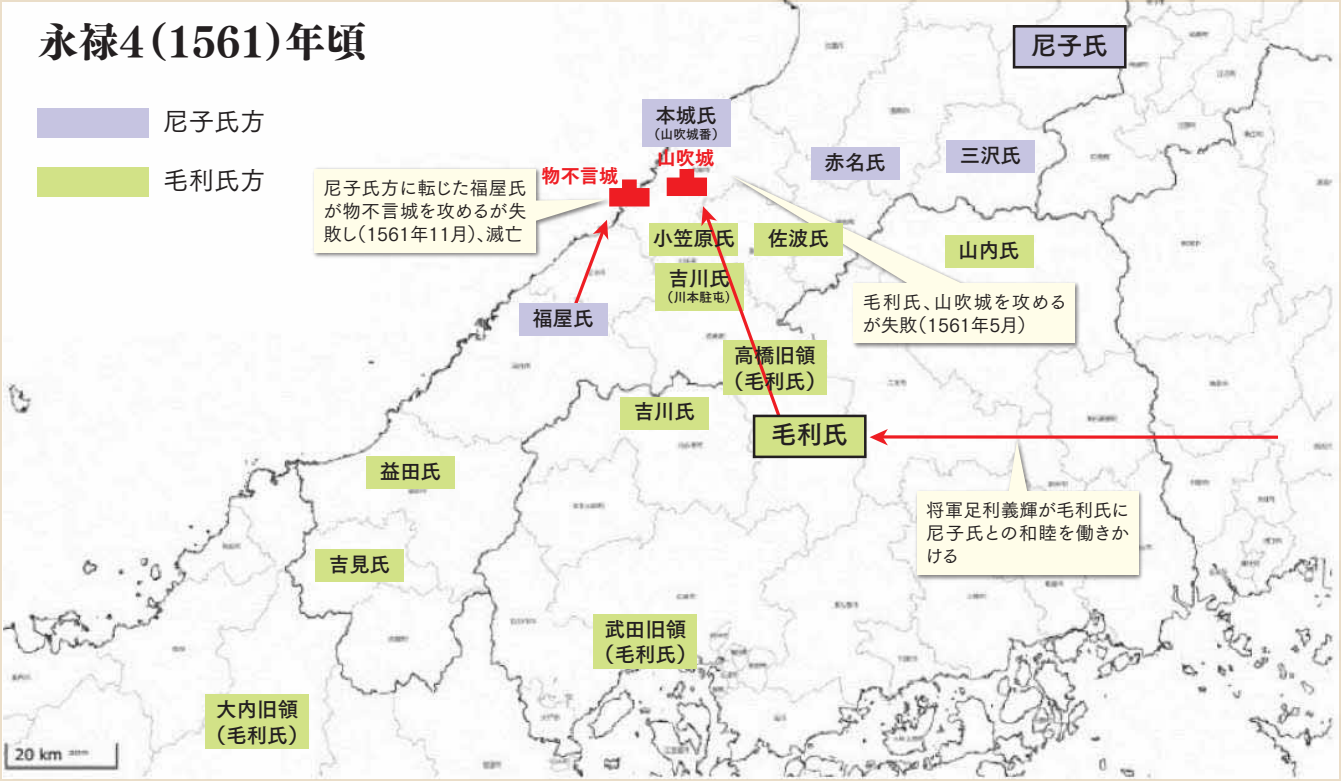
(注)陶晴賢、大内義長は、天文20年時点ではそれぞれ陶隆房、大内晴英と名乗っています。



弘治元(1555)年に厳島の合戦で陶氏を破った毛利氏が、一時的に石見銀山を支配します。しかし、時を同じくして尼子氏が銀山へ進出し、両者の間で激しい争奪戦が繰り広げられました。毛利方は忍原での合戦で大敗を喫し、銀山は尼子氏の支配下に置かれることになります。



尼子氏は出雲国の須佐高櫓城の城主本城常光を山吹城の城番に命じ、銀山支配を続けます。しかし、弘治3(1557)年に周防・長門両国をおさえた毛利氏が銀山攻撃を本格化させます。まずは川本を拠点としている尼子方の小笠原氏を攻撃して降伏させました。毛利氏にとっては、石見銀山の近くから直接銀山を攻めることができる絶好の機会を得たわけです。



尼子氏は將軍足利義輝を通じて毛利氏との和平交渉を開始し、永禄4(1561)年12月に和平が成立しました。この年の夏に毛利氏は山吹城を攻めますが、失敗に終わります。また、同年11月頃、毛利方であった那賀郡を中心に勢力をもつ福屋氏が、尼子方に寝返って物不言城を攻撃しますが、尼子氏の援軍を得られず敗北しました。

石見銀山支配の象徴 山吹城を守れ！

難攻不落の城 これが山吹城だ！

石見銀山は発見当初、大内氏が支配しており、銀山支配の拠点とされる山吹城を築いたのも大内氏と考えられています。

標高414mの要害山山頂に築かれた山吹城は山頂の最高所にある南北52m、東西33mの平坦面が主郭で、北西の張り出した部分に、敵の監視等のために築かれた櫓台が一段高く設けられています。主郭の北側には4段、南側には3段の郭が階段状に造られ、主郭の東側にある通路がこれらを結んでいます。

主郭北側郭群の虎口には石垣が用いられ、主郭と南側郭の間には堀切、南端の郭の南側斜面には土塁と堅堀を交互に絡めた技巧に富んだ畝状空堀群が配置されています。どこから攻めたのか。どうやって守ったのか。考えれば考えるほど、いかにこの山城が鉄壁の防御を誇ったのか想像できます。

あの毛利元就でさえ武力で攻略できなかった難攻不落の山吹城。畝状空堀群だけでなく、切岸も含めた縄張りには圧巻です。



■山吹城跡主郭

山頂を平坦に造成し見晴らしを確保している。陶磁器や瓦の破片が散布しており、往時には建物が建っていたと考えられる。



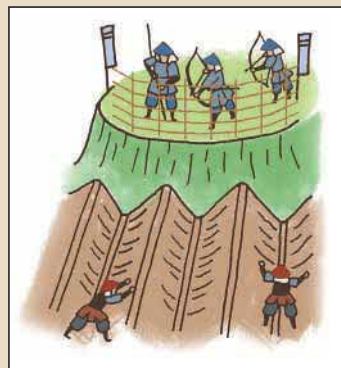
■西本寺山門

山吹城の城門と伝えられている。江戸時代初期のものと思われ、大森町では最古の建築物。

鉄壁な防御

鉄壁な防御を誇った山吹城は、城主(城番)が代わるたびに普請・改修が行われました。現在の姿は江戸時代初期の城郭と言えますが、畝状空堀群は本城氏の頃に築かれたものと考えられています。年代の異なる防御施設が混在して残る山吹城は激しい争奪戦の歴史を物語っています。

攻め上る敵を一網打尽



●畝状空堀群

少人数でも城を守るようにするため、土塁と堅堀を連続的に組み合わせた空堀群。敵は横移動ができないため堀底を歩くしかなく、攻撃がしやすい。



●石突

槍の柄の底に付ける金具で、先端が尖っているため地面に突き立てやすい。



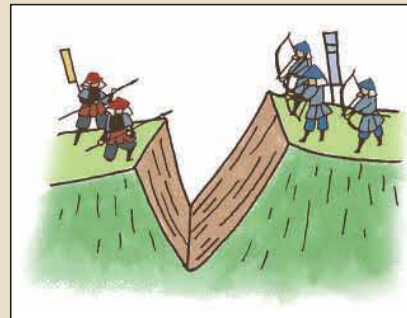
■鉄砲玉

山吹城南西麓郭跡の調査で出土した火縄銃の弾丸。直径1.2cm、重さ5.7gの円球形で未使用と思われる。



●堀切

尾根筋に直角に掘り込んだ空堀。尾根伝いに侵入してくる敵を足止めることができる。



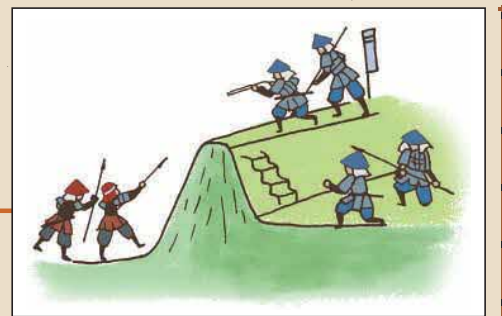
敵の侵入をシャットダウン

■主郭から日本海を望む

山吹城主郭からは大森の町並みや仙ノ山の他に、日本海や仁万の港を見下ろすことができる。



高ければ城内が見えない

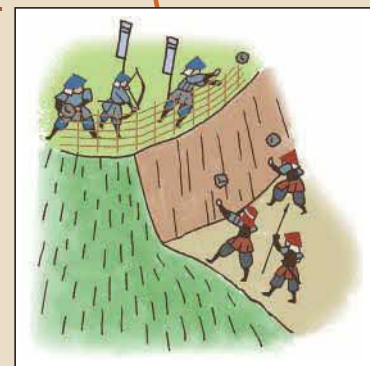


●土塁

敵の侵入を防ぐために土を盛って造った土手。上に乗れば攻撃しやすく、敵からは城内が見えにくい。矢などが飛び込むのを防いでくれる。



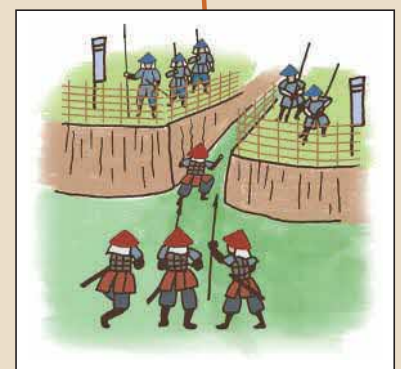
最強の防御！急斜面は登れない



●切岸

斜面を削って造り出した人為的な崖。斜面下からの敵の侵入を阻むことができる。

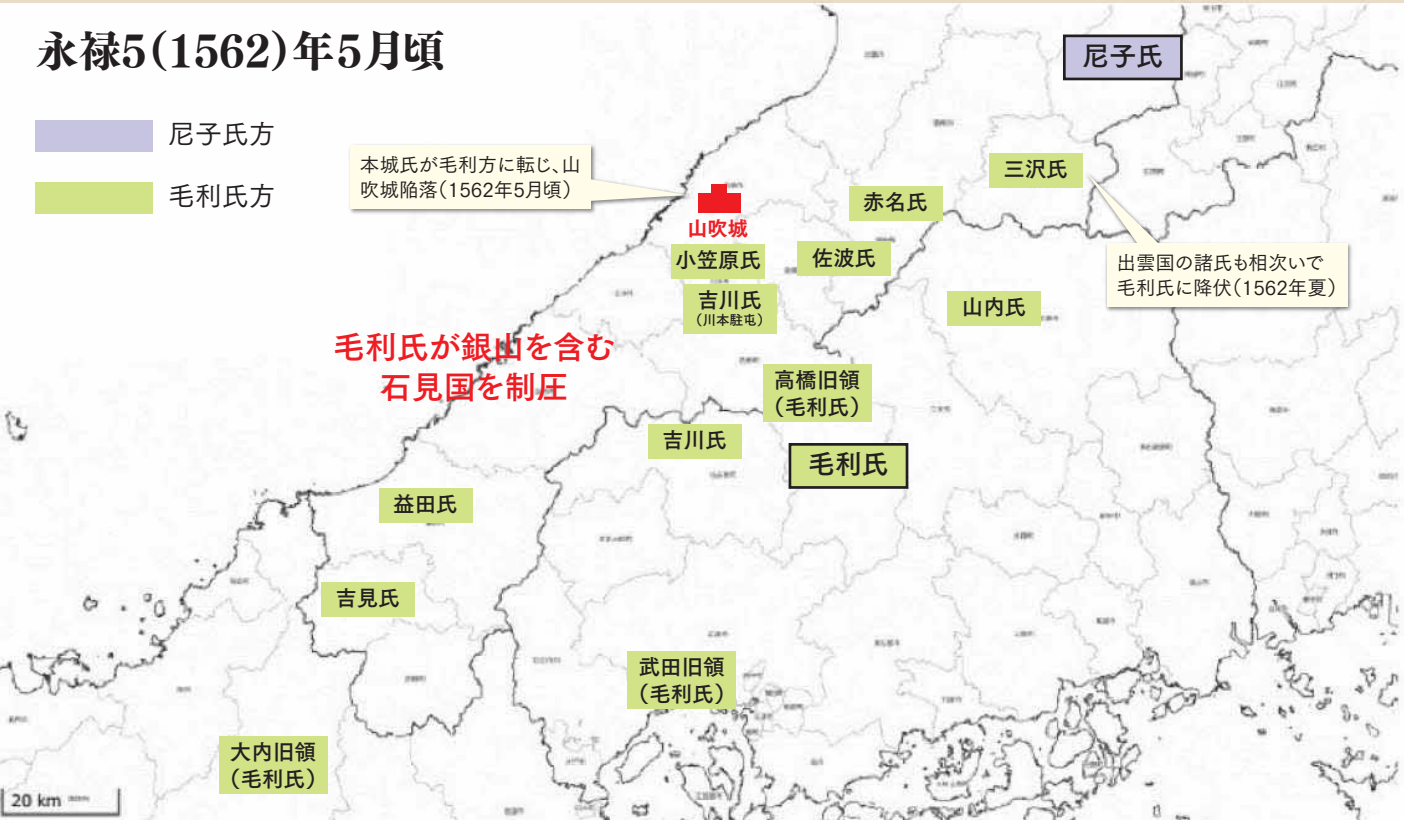
門の周囲は危険がいっぱい



●虎口

郭の出入り口。石垣や土塁で郭の入り口を囲み、敵が近づくと横から矢などを射かけられる。

毛利氏銀山奪還に成功



山吹城を守っていた本城氏が、出雲国に所領を与えるという毛利氏の条件を呑んで降伏したことで、毛利氏は銀山奪還に成功します。その後、尼子方にあった武将も相次いで毛利方に寝返ったことで、毛利氏が石見国を制圧することに成功しました。

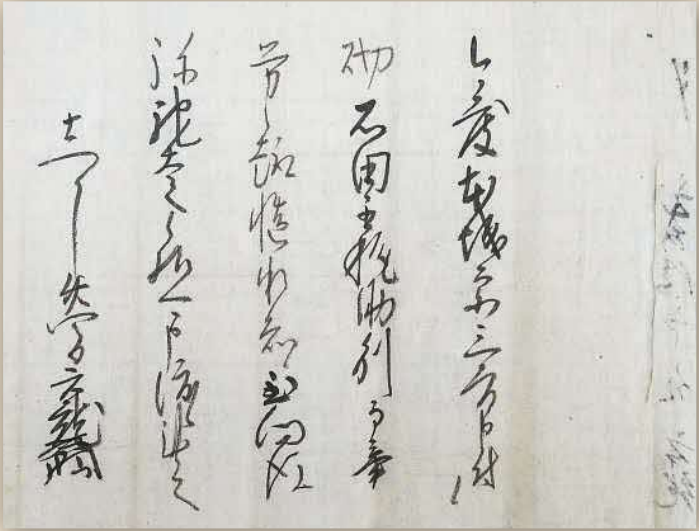
これにより銀山をめぐる激しい争奪戦は終わり、慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いまで毛利氏による支配が続くことになります。

争奪戦に翻弄された本城常光一族の最期

永禄5(1562)年の夏に毛利氏に降伏した本城常光は、同年の秋には一族ともども毛利氏によって滅ぼされました。この書状は、12月に毛利元就が本城常光一族の討伐にあたった温泉津の武将石田春俊の功勞を讃えたものです。

意味
武安孫三郎殿 元就
このたび本城宗三郎を討ち取った時、
石田春俊(主税助)が特に苦勞した
とのこと、たしかに承知した。今後とも
ますます奉公するよう、あなた(武安孫
三郎)から石田春俊に申し渡すように。
十二月二十四日 (毛利)元就

端裏書
(墨引) 武安孫三郎殿 元就
今度本城宗三郎申付候
砌、石田主税助、別而辛
勞之趣、慥承知候、至向後、
弥馳走候様、可申渡候、謹言、
十二月廿四日 元就(花押)



石田家文書(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵)

歌に詠まれた山吹城

「城の名も ことはりなれや まふよりも ほる白銀を 山吹にして」

(訳文)御城(山吹城)の名前ももっともなこと。
銀坑(間歩)より掘り出す銀を山吹色の金に替えたのだから。

これは天正15(1587)年に、丹後国田辺城(京都府舞鶴市)の城主で戦国時代きっての文化人であった細川幽斎が詠んだ和歌です。幽斎は、九州へ出陣した豊臣秀吉を訪ねるため日本海沿岸を旅し、わざわざ途中で石見銀山を訪れています。

この歌には、石見銀山支配の拠点であった「山吹」城が織り込まれており、「間歩」から掘り出された莫大な銀のことは、幽斎の耳にも届いていたようです。

争奪戦に巻き込まれた？ 山上の居館「静間城跡」

静間城跡は大田市静間町に位置する山城で、山陰自動車道(大田・静間道路)の建設工事に伴って、ほぼ全域の発掘調査が行われました。

8棟の大型建物跡のほか、備前焼などの国産陶器や中国・朝鮮半島から輸入された陶磁器、茶道具などの日用品がたくさん見つかります。山上の居館に城主が日常的に暮らし、時には茶の湯を嗜むなど、平和で優雅な暮らしが想像されますが、急峻な切岸や建物を守る土塁、投石用のつぶて石などの防御施設も備えていました。

15世紀後半に築城され、16世紀前半頃に火災に遭った静間城は、なぜか再建されることなく廃城となります。この頃は、石見銀山をめぐる近隣勢力が相次いでこの地域に侵攻した時期にあたります。もしかしたら、静間城もその争いに巻き込まれたのかもしれません。



静間城跡イメージ図



静間城跡の出土遺物(島根県埋蔵文化財調査センター所蔵)

銀山防御のための山城群

石見銀山を守る山城

石見銀山が一望 敵の動きが一目瞭然

◆^{やたき}矢滝城跡



石見銀山を防御するための山城で、郭・堅堀・堀切などで構成されています。山吹城よりも約220m高い標高634mの山頂に築かれていることが最大の特徴と言えます。

城の北側には降路坂という銀山から温泉津に向かう銀の輸送ルートがあり、東には仙ノ山や山吹城が望め、日本海までも一望できます。敵の動きを逃すことなく監視することができたのではないのでしょうか。石見銀山おさえの城と言われています。

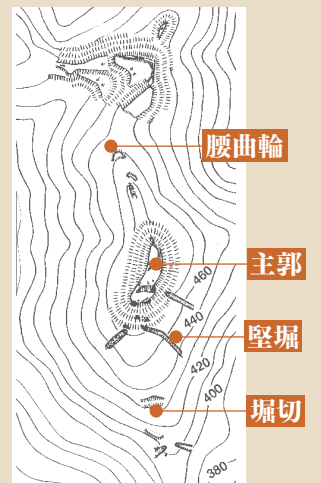


矢滝城とともに銀山を守る

◆^{やはず}矢筈城跡



標高480mの丘陵頂部に築かれた山城で、郭・土塁・石垣・堀切・堅堀などで構成されています。矢滝城とともに要所である降路坂を左右から防衛する役割を果たしたと考えられます。

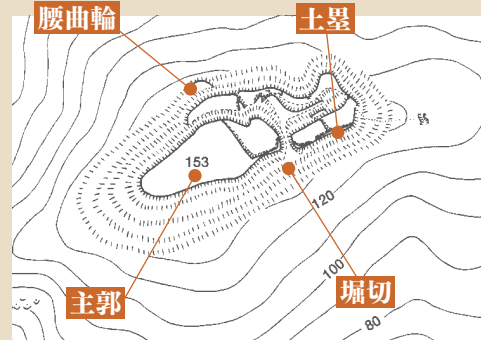


圧巻! 岩山に築かれた山城

◆^{いわみ}石見城跡



標高153mの竜巖山の山頂に築かれた山城で、仁万平野と石見銀山を結ぶ街道沿いに位置しているため、海岸部との境界を押さえる役割があったと考えられます。城域は狭いものの、丁寧に造られています。かなり固い岩盤を削って平坦な郭をいくつも造成したり、大きな堀切が掘られています。



流通の拠点 ^{ゆのつ}温泉津港を守る海城

敵船の来襲を監視する

◆^{うのまる}鵜丸城跡



温泉津湾の湾頭に向けて、東側から突き出る尾根筋の先端に築城されています。毛利水軍の基地であり、石見銀山の銀の積出しと銀山への物資搬入の拠点として栄えた沖泊・温泉津の警護のため、毛利氏によって築されました。

また、周囲の海岸の岩場には、「鼻ぐり岩」と呼ばれる船の綱をつないだ穴を今もたくさん見ることができます。当時、毛利方の船もたくさん泊まっていたのでしょう。

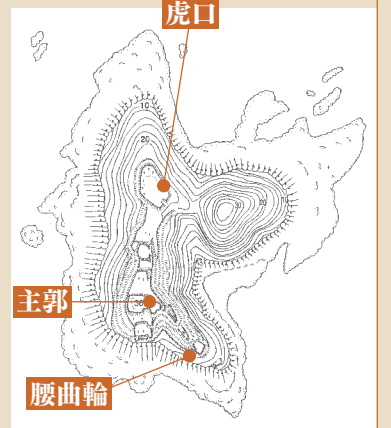


これが海城! 敵船を撃退して温泉津港を守る

◆^{くしやま}櫛山城跡



温泉津湾の湾口東突端にあたる径約300mの島に築城された典型的な海城で、鵜丸城跡と沖泊湾を挟んで対峙するように築かれています。もとは温泉氏の居城でしたが、毛利氏によって改修されたと考えられています。温泉津港の防衛のために、湾口と日本海側に面するところに普請が集中しているのが特徴と言えます。



「番外編～鉄砲の登場と山城」

石見で最初に鉄砲が使われた山城

◆^{ものいわず}物不言城

永禄4(1561)年、毛利方の武将が尼子方の軍勢を撃退する際に鉄砲で応戦したとする記録が残っています。毛利氏が初めて鉄砲を使用してから4年後のことですが、石見国ではこの時、初めて鉄砲が使われたようです。



山吹城の終焉

関ヶ原の戦いの直後、徳川家康はいち早く石見銀山を支配下に置き、翌年には大久保長安が初代の石見銀山奉行に就任します。

矢瀧城などが廃城となる中、長安は山吹城の普請を行い、麓にあった「休役所」も利用して政治的な役割を継続させました。しかし、寛永年間(1624～1643)には銀山町から隣接する大森町へ政治拠点が移り、銀山支配の象徴であった山吹城は、代官所の官有林「御立山」へと姿を変えました。

平和な時代を迎えて争奪戦の舞台となった石見銀山一帯の山城は、その歴史的役割を終えたのです。

■元和年間(1615～1623)の絵図

石見銀山をめぐる柵の中で、山吹城はひととき高い山頂に大きく描かれている。
(浜田市教育委員会蔵)



■山吹城跡出土瓦

山吹城跡から出土した瓦。長安が普請を行った際、建物に使用された瓦と考えられている。



■正保2(1645)年の絵図

かつて山吹城があった一帯に建物は描かれていないので、この時点では廃城になっていたと考えられる。
(津和野町教育委員会蔵)

◆石見銀山争奪戦の歴史

西暦	和暦	銀山の支配者	主な出来事	日本の主な出来事
1527年	大永7年	大内氏	博多の商人・神屋寿禎が石見銀山を発見する。	
1528年	享禄元年		大内義興が矢瀧城を築き、銀山防衛の拠点とする。	
1543年	天文12年			鉄砲伝来
1551年	天文20年		陶隆房(晴賢)が主君の大内義隆に背いて大内氏の実権を握る(義隆は自刃し、大内晴英(義長)が擁立される)。	
1553年	天文22年		この頃、刺賀長信が大内義長から山吹城の守備を命じられる。	
1555年	弘治元年		毛利元就が厳島の合戦で陶晴賢を破る。 この後、大内義長の勢力は衰え、山吹城を守る刺賀長信は毛利元就に従う。	
1556年	弘治2年	尼子氏	尼子晴久と毛利元就の銀山争奪戦が始まる。 はじめは毛利元就が銀山を支配するが、忍原での合戦で尼子晴久に敗れ、尼子氏が山吹城を制圧する。 尼子晴久が本城常光に山吹城の守備を命じ、銀山を支配する。	
1559年	永禄2年		銀山攻略の障害になっていた川本の小笠原長雄を、毛利元就が降伏させる。	
1560年	永禄3年			桶狭間の合戦
1561年	永禄4年		毛利元就に従っていた福屋隆兼が、尼子晴久に味方して福光の物不言城を攻めるが失敗。石見国で鉄砲が使用されたことがわかる最初の合戦。	
1562年	永禄5年	毛利氏	山吹城を守る本城常光が毛利元就の誘いに応じて降伏するが、直後に一族と共に滅ぼされる。 毛利元就が銀山を完全に掌握する。	
1573年	天正元年			室町幕府滅亡
1582年	天正10年			本能寺の変
1600年	慶長5年	徳川氏	関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が銀山を直接支配する。	

編集・発行 島根県教育庁文化財課世界遺産室

〒690-8502 松江市殿町1番地

TEL:0852-22-5642 FAX:0852-22-5794

令和7年3月改訂